歴史寫眞

十一月

滿州事變特輯號

第一巻

歴史寫眞第二百二十三號
昭和六年十月二十五日印刷納本　大正二年三月一日第三種郵便物認可
昭和六年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

□本號表紙寫眞　紅項子に於ける我軍の活躍

滿洲事變特輯號發刊に際して

○支那は元來歴史の國である。古代の支那は文華燦爛たるものがあつた。日本の上代の文化が支那のそれを母胎として生れ出で生育し發達したことは誰でも知つてゐる。故に日本に取つては支那は恩誼の國である。のみならず彼と我とは一葦帶水の隣邦である。同文同色の民族である。生活の上の風俗習慣に於ても類似の點が尠くない。そこでお互ひに『おい兄弟』と呼びかけ合つてもその間少しも不自然でなく、わざとらしくない感じの國民である。

○然し『兩雄比び立たず』とは能く言つた。彼と我とが各自に『東洋の盟主』を以て任じ、互ひに覇權を掌握しやうとした結果は、遂に『日清戰爭』の勃發を見るに至り、その結果支那の野望は一蹴されて、日本は斷然『亞細亞の覇者』なる資格を獲得するに至つた。爾來、彼の老大國が新進氣鋭の若き日本を見る目には悉く嫉妬と憎惡の醜い光が宿るやうになつたのである。

○尊敬すべき歴史の國、——古き日本の生みの親ではあるが、既に彼と我との內容實質に於ては格段の差別がついて來た。昔、我等を導いて吳れた彼等は、今や我等の手に依つて導かれねばならない國となつたのだ。然し過去の榮華の夢を追ひ、冷靜な省察と、深刻な認識とに缺けてゐる彼等は、徒らに誇大妄想的自負と空想とに驅られた結果、事每に日本を侮蔑し排斥せんとするに至つた。然し日本は自重した。群る蠅を趁ぶやうな煩ばしさと焦燥とを靜かに隱忍しつつ泰然として動かなかつた我等の姿は立派だつた。

○然るに今度の滿洲事變である。——滿洲は素より日本の領土ではない。例へば是は、玆に兄弟二人があり、兄は弟と相談して自分の畑と隣接する弟の畑若干坪を借り受け、貸借の公正證書までも取交はして、その地に溫室を造設し多くの花や果物を栽培した。さうしてそのくさぐ〵の花や果物は今や兄に取つて最も大切なる財源となつてゐるのだ。ところが暴戾無智の弟は、兄を嫉視し憎惡する餘り、突如、密かに暴力團を造はして兄の借地に亂入しその溫室を破壞せんと企てた。

○堪忍袋の緒は切れた。——是まで數々の弟の惡業を胸撫で擦つて押し堪へてゐたその堪忍袋の緒は切れた。憤然として起つた兄は、擧て世間に勇名を轟かしてゐる通り膂力衆に勝れた快男子だ。鐵拳一振、忽ちにして薙ぎ倒された暴力團、再び起ち上る勇氣もなくその儘べちやんこに押しつぶされ、白日の下に捷間しい醜態をさらけ出した。然し『その罪を憎むでその人を惡まず』だ。兄は決して弟を何此上にも打懲らさうとは考へてゐない。負け惜しみの强い弟が、大の遠吠のやうに、頻りにやけの惡口を浴びせてゐても、寬容な兄は聞いて聞かぬ振り、成るべく事を荒立てたくないといふのがその本心の願ひである。

○滿洲今度の紛爭はざつと此のやうな始末である。日本は決して此機に乘じ領土を擴張しやうといふやうな野心を抱いてゐるのではない。約束され承認された我が權益の數々が正當に且つ安全に保障され又擁護されさへすればそれで好いのだ。再びいふ支那は日本の生みの親だ。同文同色の民族だ。僅かな一頃の水を挾んで相呼應し得る國土である。さうして今や世界の大勢は日支兩國お互ひに提携扶助し且又自重加餐すべきの秋である。——弟よ、弱き弟よ。その目を上げて正しく汝の前途を見よ。

謹告

本號は滿洲事變突發の爲め御覽の通り特輯號といたし、表紙を始め口繪本文等にも右事變に關する多くの寫眞を揭載いたしました。從つて從來の連載物中、一二ものを休載しなければならないことになりましたが、連續購讀者諸氏一方の御期待に副はんが爲め、最も重要なる連載物は成るべく是を揭載することとし、他に關東地方の强震被害と多くの**ニュース**寫眞中意義あるもの二十數種を插入いたし單に十一月號としての價値をも保たせることに力を注ぎました。然るに滿洲の事變は未だ解決するに至らず各地に於ける支那殘兵の暴虐や、北平、南京、上海其他に於ける猛烈なる抗日、排日の氣勢等、事態は甚だ樂觀を許さざるものあり、是等に關する寫眞等も陸續到着いたしてをりますから、來る十二月號は更に

滿洲事變特輯號　第二卷

として發行いたす計畫で御座います。本號、卽ち第一卷を御購讀下さつた各位は、何卒此の第二卷をも併せて御買上げ下され、國家的事變を長く後世に記念せられますやう偏にお願ひ申上げます。

枕頭三尺剣
瓶裏一枝梅
夢覚寒燈下
病魔乞降来

春畝山人

五絶　伊藤博文公筆

◇◇◇我軍の爲に燒かれつゝある紅頂山の支那兵營◇◇◇

占領後の奉天城壁下を守備する日本軍

高尾の紅葉

（黒川翠山寫）

京洛趣味めぐり ◆◆◆ 吉野太夫の遺跡

權勢に怖ぢず、富豪に媚びず、多技多能風流の道に志を同じくする灰屋紹益と共鳴して、華やかな花街の生活を辭し、紹益の正妻として餘生を共にした京都六條三筋町の名妓二代吉野太夫の遺跡は今も京洛に殘つて、その艶名と共に永へに泯びない。寫眞の右上は京都鷹ヶ峰常照寺の太夫門で、吉野が同寺日乾上人に歸依し淨財を寄捨して建てたもの、一時倒れてゐたのを、近年吉野會で再興したところ。左は同寺墓地にある吉野太夫の墓で、寛永二十年八月二十五日三十八歳で歿した吉野がとこしへに眠るところ、吉野の歿した時、紹益は悲しんで茶毘の灰を飲むだと傳へられる位の綿々たる愛に絆されてゐたのである。又右下は京都元誓願寺にあつた吉野の茶亭を高臺寺に移し修補した鬼瓦の茶亭で、破風には今も鬼瓦が掲げられてゐる。洛東の名席である。詳細は拙著『灰屋紹益と吉野太夫』を參照ありたい。（風俗研究所長　江馬務）

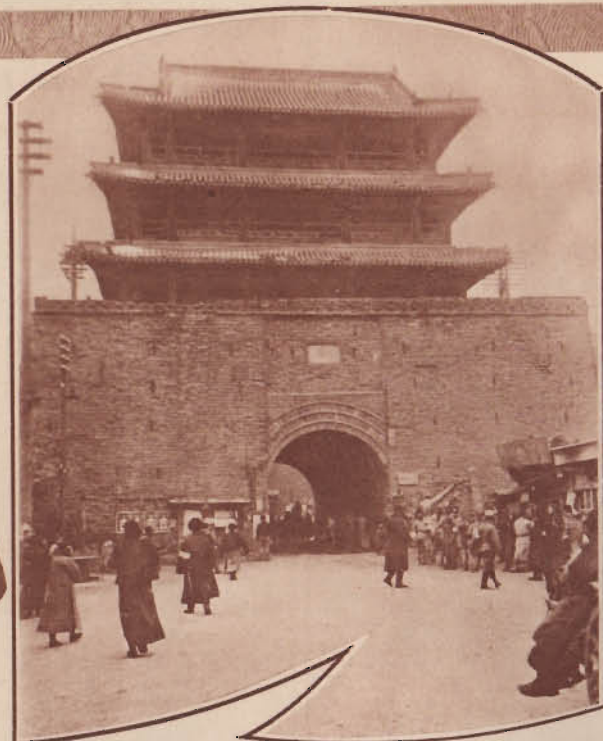
古英雄と其の遺蹟 ◆◆◆ 木曾義仲

源義仲は爲義の第二子義賢の子で、幼名を駒王丸と呼んだ。父義賢が義平に殺された時年僅かに二歳、義平その後患を慮り、畠山重能に囑して遺孤を求めさせた。重能是を憐れみ、密かに齋藤實盛に托した。そこで實盛是を信濃木曾なる中原兼遠の許に送り養育せしめたが義仲長じて英邁、覇氣猥くが如く、自ら木曾冠者と稱し只管風雲の至るを待つた。治承四年、以仁王の令旨下るに及び義仲忽ち蹶起して、先づ平通盛、經正を越前に破り、又維盛、盛俊を礪波山に撃破し、長驅して叡山に至つたので平氏悉く怖れをなし西海に奔つた。かくて義仲京師に入るに及び、漸く横暴を極め天皇及び法皇を幽し奉つた。天曆元年、範賴、義經鎌倉より來攻するに及び、諸將を分つて宇治、勢多に防がしめたが戰ひ利あらず義仲敗走して近江粟津に遁れ流矢に中つて終に亡びた。時に年三十一である。寫眞の右は大津市馬場の義仲寺に在る義仲の墓。中上は義仲の敗死したる粟津の松原。左下は義仲の開基に係る信州木曾の古刹德音寺の全景である。

第百十四代中御門天皇月輪陵

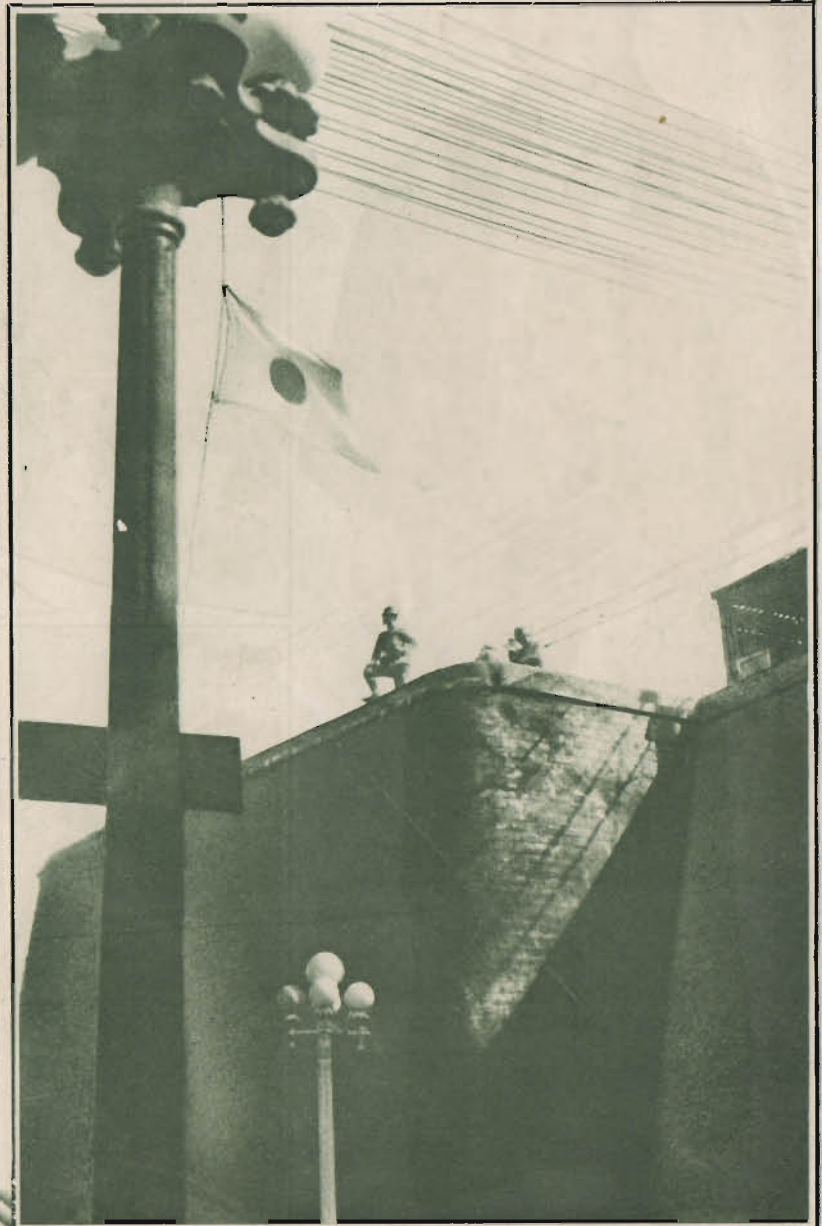
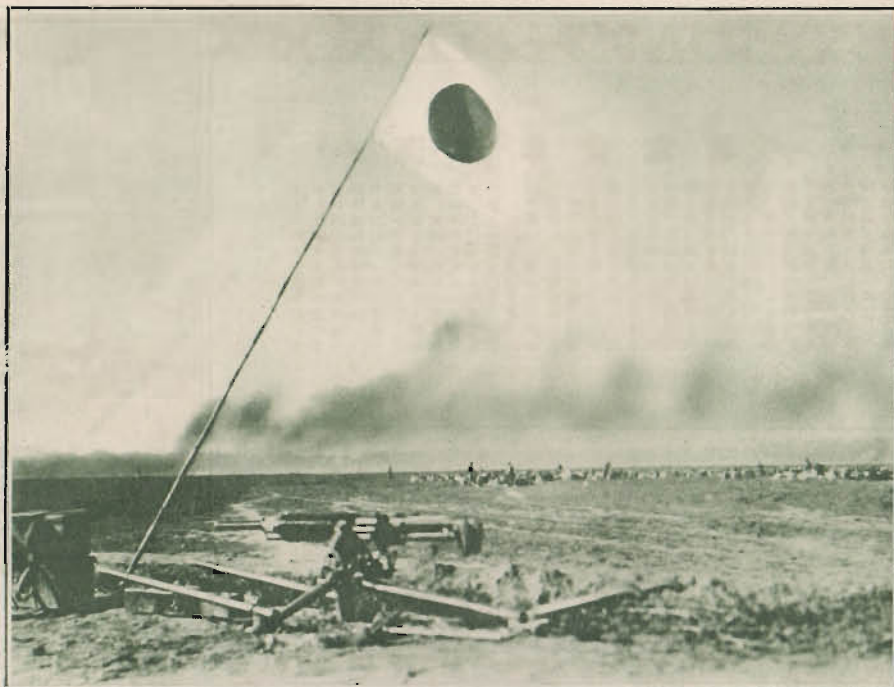
第百十四代中御門天皇は第百十三代東山天皇の第五皇子に亙せられ、御諱は慶仁と申し奉つた。御母は内大臣櫛笥隆賀の女で新崇賢門院藤原賀子である。元祿十四年十二月の御降誕、寶永五年二月皇太子に立ち、同七年十一月十一日紫宸殿に於て卽位の大典を擧げさせ給ふた時に御年十歳に亙らせらる。在位二十六年、卽ち享保二十年三月位を皇太子に讓らせられ、元文二年四月十一日崩御遊ばされた。御壽三十七に在す。五月八日月輪陵に葬り奉る。天皇、太く音律を好ませられ、夙に雅樂を興すの御意あり、伶人辻任等に命じて舞樂の『春鶯囀』を復興せしめ、其他禁中の諸儀舊典に復するもの尠くなかつた。御祭日は五月十日である。(宮内省御許可)

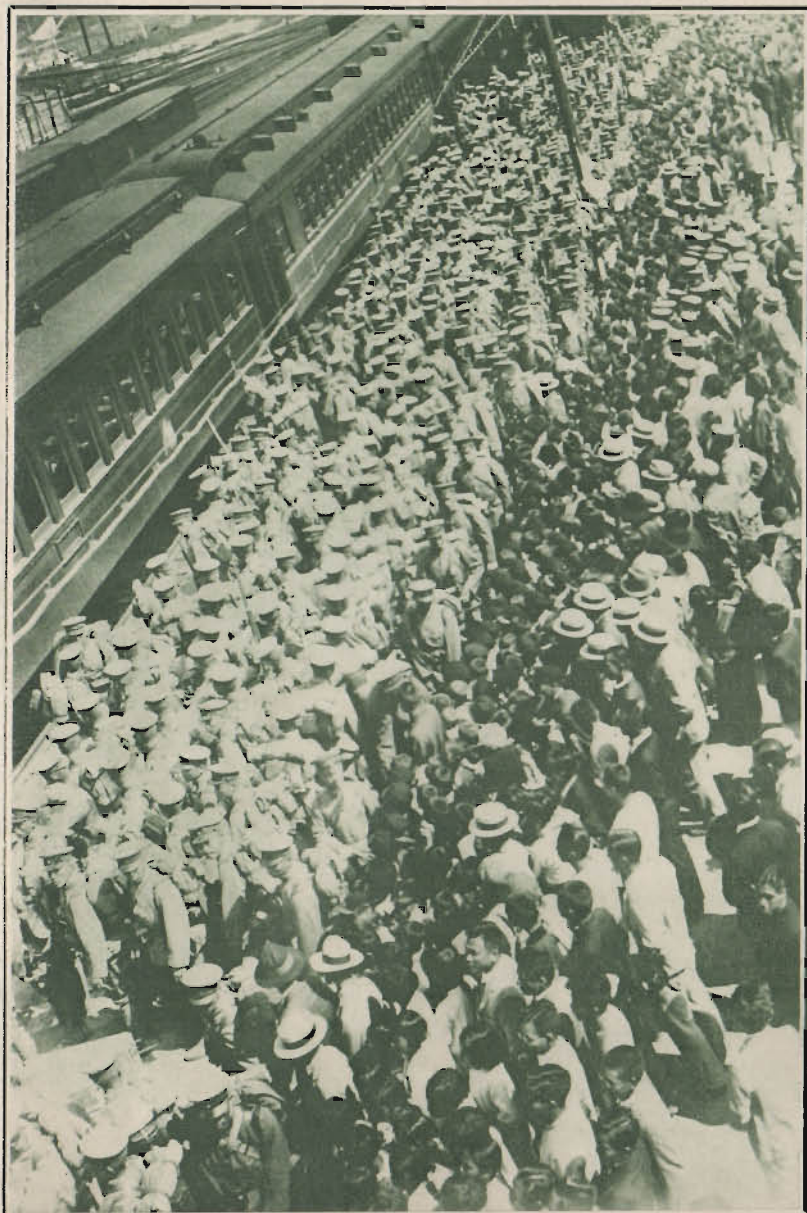
十二ヶ月の内
祝月
豊国画

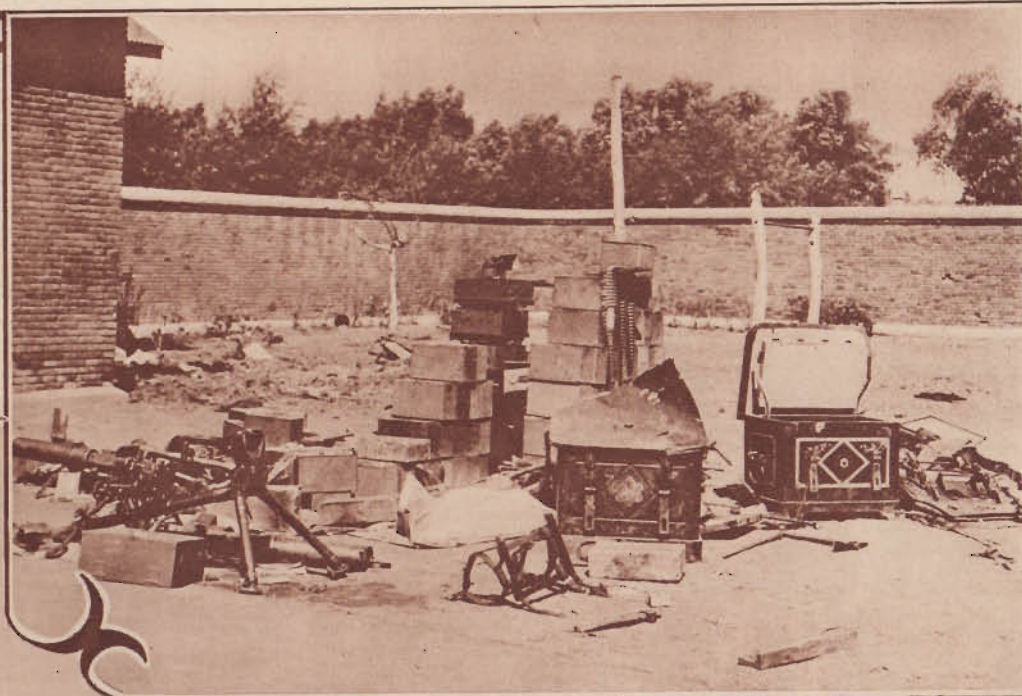
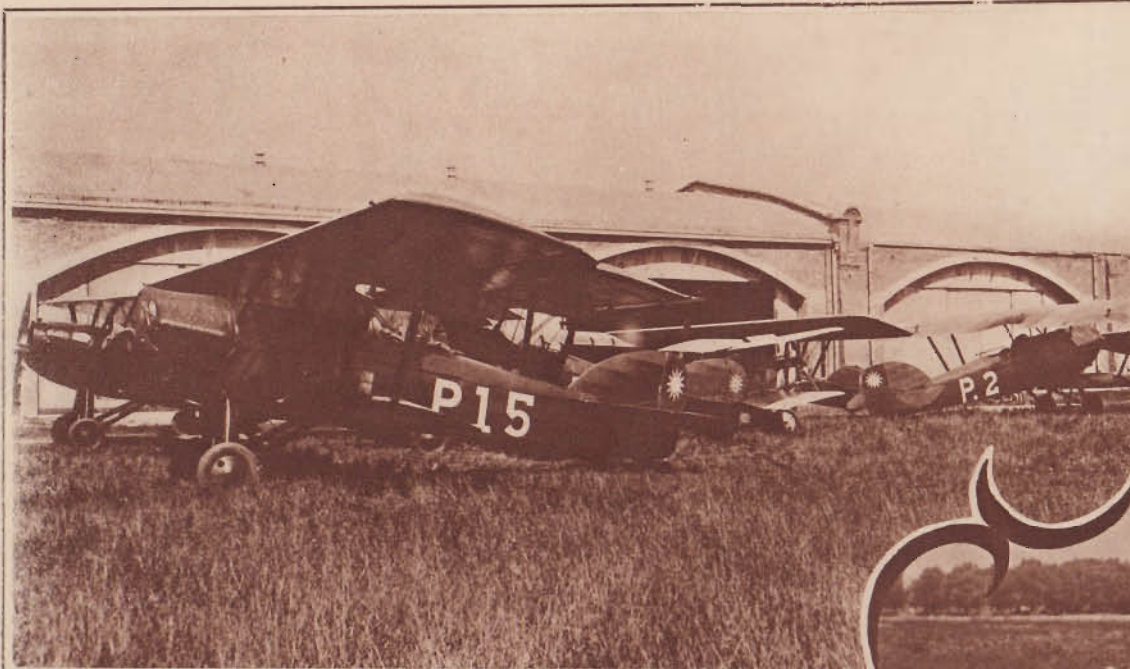
出動準備に劍を磨く
龍山歩兵〇〇聯隊

◆◆◆ 滿洲事變寫眞（其一）◆◆◆

九月十八日の夜支那兵の滿鐵破壞を動機として日支兩軍衝突の飛電到來するや陸軍省及び參謀本部は異常の緊張を來し、南陸軍大臣、金谷參謀總長等は堅き決意を眉宇の間に示し驚天動地の大事變は今將に釀し出さるるものの如くに見えた。寫眞の右は金谷參謀總長。中上は奉天城小西門。同下は地圖を按する陸軍省新聞班。左は悠々たる態度を示す南陸軍大臣である

滿洲事變寫眞（其二）

九月十八日の夜、奉天郊外滿鐵沿線に於て日支兩軍衝突するや、我軍奮戰忽ち敵陣を攪亂し、隊伍堂々奉天に入城し電光石火一瞬にして是を占領した。寫眞の右は奉天城の城門を守りつつある我軍の兵士。又左上は長春方面に出動せんとしつつある我軍の裝甲列車。同下は九月二十日三台子山頂より昌圖附近紅頂山の敵狀を觀測しつゝある右川村重砲〇〇聯隊長。左獨立守備隊司令官森中將で、同方面の戰鬪は甚だ激烈を極めた

滿洲事變寫眞（其三）

九月十八日夜奉天郊外柳條溝に於ける日支兩軍の衝突に引續き、我奉天駐劄軍第一第二大隊は十九日拂曉奉天城内を占領し、一方獨立守備隊は支那兵の根據地北大營を攻略した。寫眞右上は武裝を解除された北大營の兵隊。同下は奉天戰に於ける我機關銃隊の活躍。左は事變突發と共に朝鮮龍山驛を出發滿州へ出動せんとする第〇〇聯隊と見送りの大群衆である

滿洲事變寫眞（其四）

九月十八日午後十時三十分頃奉天北大營所屬の支那兵約三百名が柳條溝の滿鐵線路の爆破を企てつつあつたのを我が鐵道守備隊が發見したるところ支那側より發砲せる爲め是に應戰、兩軍の間に衝突の不幸を見るに至つたもので、我軍は疾風迅雷の如き早業を以て、一擧に北大營を占領すると共に、軍の一部は奉天內城に進擊し、激戰數刻にして忽ち是をも攻略し、更に東大營を奪ひ、兵工廠及び飛行隊を奪取し、茲に奉天城を中心とする東北軍を全滅せしむるに至つた。寫眞の右上は奉天戰に於て我軍の鹵獲した支那軍の兵器で、中には某國製の最新武器もあり優秀なものが尠くなかつた。左下は九月二十日昌圖附近紅頂山の戰鬪に於て敵陣を猛擊しつゝある我が重砲兵隊。又右下は事變勃發と共に自己の獨斷を以て滿洲へ出動したる林朝鮮軍司令官である

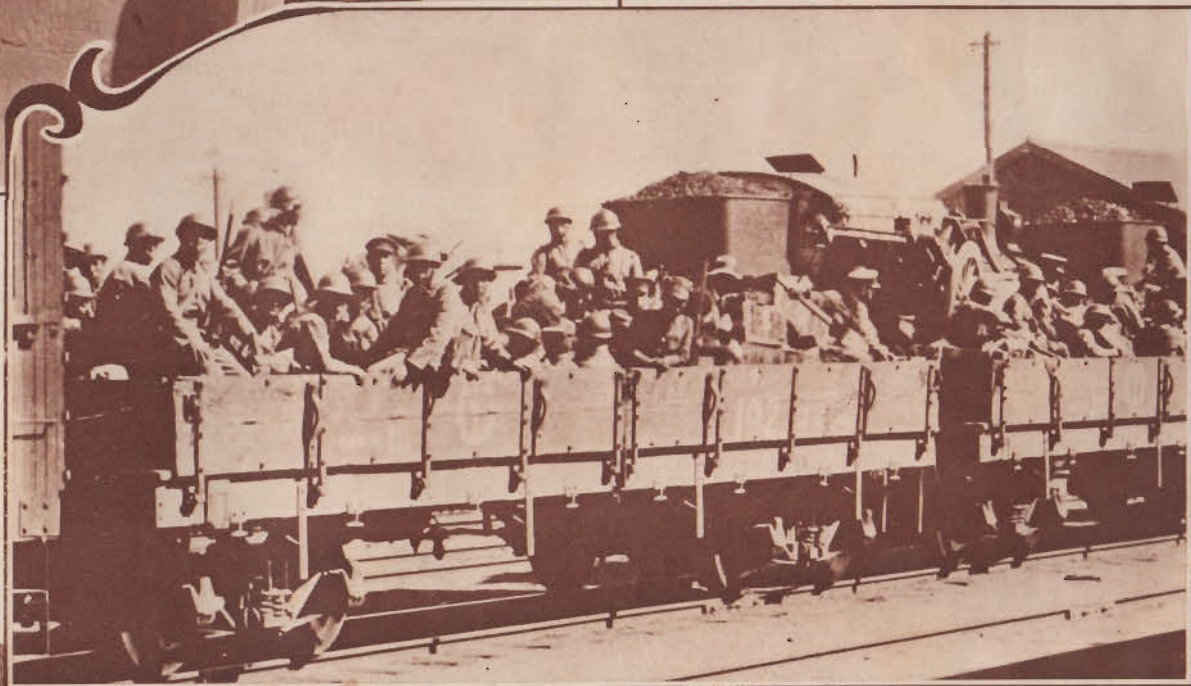
滿洲事變寫眞（其五）

柳條溝の日支衝突に端を發し直ちに北大營に殺到したる我軍は、一時その北部を占領したるも敵勢漸次に増加して約一千を算すに至り爲めに苦戰に陷つたが更に屈せず、猛撃を加へ、十數發の我砲彈は北大營に命中して徹底に是を破壞し、支那兵の死傷數百名を算するに至り、十九日午前二時遂に全く是を占領した。寫眞の右下は激戰のあと、左上は我軍の占領したる奉天飛行場格納庫と飛行機。下は關東軍司令官本庄中將

◆◆◆滿洲事變寫眞（其六）◆◆◆

寫眞の右に示したる**ポスター**は支那兵の滿鐵破壞計畫を證明するもので、右は北大營兵營内に貼られありたるもの。左上は王旅長の訓示。同下は王旅長の秘密命令文書の燒け殘りである。又左上は奉天商埠地の大通りに於て市街戰に備へつゝある我が裝甲車。同下は支那兵が我が鐵道を爆破したる際の破片と現場に遺棄されありたる彼等の軍帽、銃器其他である

◆◆◆滿洲事變寫眞（其七）◆◆◆

旅順に在る我が關東軍司令部は九月十九日拂曉多門中將の率ゆる遼陽師團の出動命令と共に奉天に移駐することに決定、本庄軍司令官は幕僚を從へ同日奉天に出動、軍の指揮統監に當ることとなり、又關東憲兵隊司令官二宮少將も本庄司令官に從ひ奉天に出動した。寫眞の右上は即ち奉天に移駐したる關東軍司令部。同下は支那の巡警が奉天に出動したる日本軍憲兵指揮の下に城内及び商埠地の治安維持に力めつつある有樣。左上は九月十九日長春南嶺に於て約三千の敵兵と前後十時間に至る激戰を行ひ遂に是を潰亂したる際、長春駐屯第〇聯隊營庭に收容したる敵兵捕虜である。尚此地の戰鬪に於て我軍の負傷は公主嶺より來た獨立守備隊第一大隊長小河原中佐以下將校五名、下士卒六十二名、卽死者は中隊長倉本大尉以下下士卒二十八名、步兵第四聯隊卽死下士四名であつた。尚此戰鬪に際し敵の所有せる大砲は山砲六門、野砲三十六門計四十二門で、砲彈三萬發は全部是を鹵獲した

滿洲事變寫眞（其八）

九月十九日我軍の奉天入城と共に、遼寧省の主席臧式毅氏、參謀長榮臻氏等を始め支那側大官は全部姿を匿しその政治機能は一切停止せられたるも、嚴正なる我軍の規律に信頼した城内外の支那人は孰れも落着いて其堵に安んじてゐたが、更に同夜本庄關東軍司令官の發したる布告、及び憲兵隊の手により市内の要所々々に貼出されたる治安維持の布告等にて、市内は日ならずして靜穩に歸し商埠地街に於ても次ぎ／＼に門戸を開いた。寫眞の右上は我軍の奉天入城と共に占領したる中國銀行。左上は奉天城内に貼出されたる我が憲兵隊の治安維持に關する布告。又左下は九月二十日長春驛より某方面に向ひ出動せんとする我軍用列車である

(其一)奉天兵工廠を占領せる我軍

事變突發するや奉天に於ける我が駐剳軍の二個大隊は九月十九日午前二時奉天城內一帶を包圍し、同六時に至り步兵一ヶ中隊は城內大南門を占領し、張學良氏の私邸を包圍すると共に、他の一部隊は奉天城の東に在る兵工廠に向つて攻擊を開始し、同八時完全に是を占領した。寫眞は卽ち同兵工廠を占領せる我軍である。

◆◆◆滿洲事變寫眞◆◆◆（其二）我軍奉天城に入る

奉天に於ける我が駐劄軍は九月十九日午前二時奉天城內一帶を包圍すると共に、午前六時半大南門を占領し、更に內城の內側の城壁上を全部奪取し、同時に北大營を攻略すると共に午前八時頃までに奉天城內とその附近を完全に保障占領するに至り、日章旗朝風に飜つて全軍の士氣彌が上にも旺んなるものがあつた。

◆◆◆滿洲事變寫眞◆◆◆（其三）兵工廠に於ける浮虜收容

奉天城は九月十九日早朝、その內城外城共我が手中に歸したが、我軍は奉天城を中心とする東北軍を全滅せしむる方針の下に先づ東大營の攻擊を開始し、次で東北航空隊飛行場及び兵工廠をも完全に占領し多數の俘虜と兵器を鹵獲した。寫眞は兵工廠內に在りたる支那兵が俘虜となり我軍に收容されつつある有樣である。

◆◆◆滿洲事變寫眞◆◆◆（其四）小西門上の我軍

事變突發と共に電光石火目にもとまらぬ早業を以て奉天城の內外を占據した我軍の行動はその神速機敏今更ながら驚歎に値するものがあつた。卽ち我が駐劄軍と獨立守備隊とが相連繫して奉天占領の行動を開始したのは十九日の午前二時で同八時には早くも完全にその目的を達成したのである。寫眞は內城小西門上に武威を張る我軍である。

華州

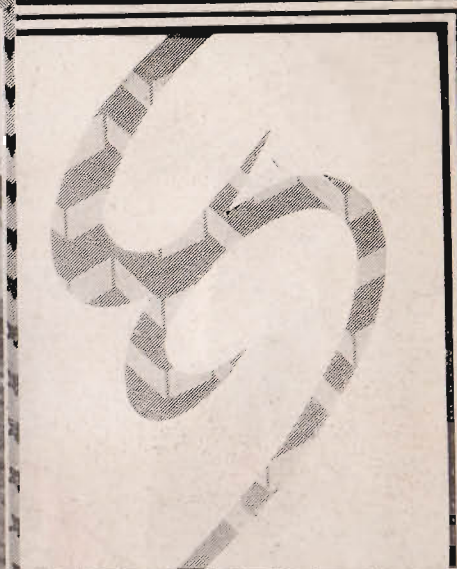
帝國海軍の偉容 ◆◆◆ 一等巡洋艦『古鷹』

一等巡洋艦『古鷹』は我が造艦術の粋を極めて建造せられた此種最新式巡洋艦最初のものであつて、是が竣工と共にその獨得の創意に係る精鋭無比の兵装は太くも列強に脅威を與へ俄然世界の視聴を蒐むるに至つたのである。『古鷹』は排水量七千五百噸、速力三十三**ノット**、垂線間の長さ百七十六米七十九、最大幅十五米四十七、平均吃水四米五〇、二十**サンチ**即ち八吋砲六門、八**サンチ**高角砲四門、機關銃二門を装備し、僚艦『加古』『衣笠』『青葉』と共に其の型を同じうしてゐる。大正十一年十二月の起工に係り、同十四年二月進水し、同十五年三月竣工した。製造所は三菱長崎造船所である。(海軍省御貸下)

各宗大本山まゐり ◆◆◆ 眞宗本派本山西本願寺

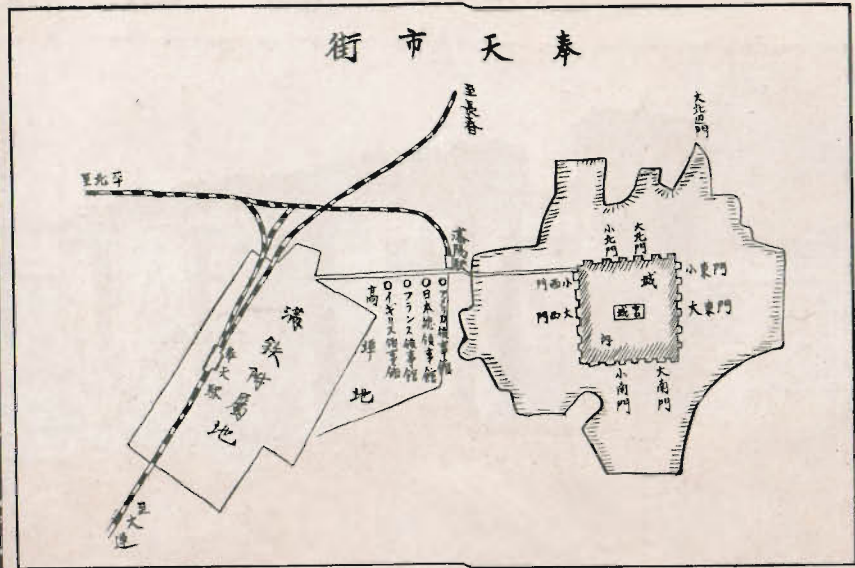
京都堀川七條の西本願寺は眞宗本派の本山で、文永九年淨土眞宗の開祖親鸞聖人の女覺信尼が東山大谷の墓地に廟堂を創建せしに始まり、創立後屢々戰亂に會し、第八世蓮如の時、比叡山僧徒の爲めに殿堂を燒かれ、一時本山を山科に定め、又、第十世證如の時大阪の石山に移り、第十一世顯如の時、信長に抗して兵火を交へ、その後轉々處を易へたが、天正十九年豐臣秀吉の寺地寄附に依り今の處に基礎を定めた。今の堂宇の內阿彌陀堂は單層入母屋造にして寶曆十年の造營に係り中央には本尊阿彌陀佛の立像を安置し、又御影堂は同く單層入母屋造にして寬永十三年の建立に係り中央厨子に親鸞座像を安置してある。此二堂は特別保護建造物に屬し、此他唐門、書院玄關、黑書院、飛雲閣等いづれも模範的建築物である。

（黑川翠山寫）

◇◇◇滿洲事變寫眞◇◇◇（その一）

九月十八日夜、日支兩軍の衝突と共に第〇師團の一部及び獨立守備隊が奉天東大營及び北大營其他に於て支那兵を蕩掃しつつある間に我が長春駐屯軍の一隊は時を移さず寛城子に於ける支那兵營を襲撃して是を奪略し、更に南嶺に向つて攻撃を開始したが、支那側は吉林方面より應援隊を得たるものの如く兵力俄かに増大し、我軍力闘、交戰實に十時間に及び漸く是を占領したが、我軍の死傷約二百名の多きに上り損害甚だ大なるものがあつた。寫眞の右下は長春南嶺第三營内に於て我軍の猛射したる砲彈に斃れたる支那兵馬。又左上は同第三營の兵舍が我軍の爲めに爆破されたる慘狀である。

（**左上**）我が砲彈に破壞されたる支那兵舍（**右下**）南嶺第三營内に於て斃れたる支那軍の兵馬

滿洲事變寫眞（その二）

（右上）奉天駐劄軍第一第二大隊は九月十九日午前二時奉天城内一帶を包圍し午前六時半大東門を占領したるを手始めに城の内外を完全に保障占領した。その時東北邊防軍司令長官公處衞戍隊第一營門に支那の武裝兵約五百名潜入しゐたるを發見、直ちに武裝を解除し、續いて城内各處の支那兵を孰れも悉く武裝解除し、玆に全く奉天は我軍の支配下に置かるる事となつた。寫眞は我軍の占領したる同城内支那市街地。（同下）奉天滿鐵附屬地境界線に張られた鐵條網。（左上）我軍の占領したる東北邊防軍司令長官公署。（同下）九月二十二日吉長線下九臺驛前に塹壕を掘る我兵である。

（右上）我軍の占領したる奉天城内支那市街地　（同下）附屬地境界線の鐵條網
（左上）我軍の占領したる東北邊防軍司令長官公署　（同下）下九臺驛前に塹壕を掘る我軍

滿洲事變寫眞 ◇◇◇（其の三）

（右上）我軍の占領したる東北航空司令部　（同下）奉天に於ける自警團の警戒振り
（左上）戰火の巷となりたる奉天四平街　（同下）小西門下に於ける我兵の檢閲

（右上）事變突發と共に參謀本部より『日支重大危機に逢着す。この際奉天軍を徹底的に擊滅し以て奉天政權の暴戾を斷乎膺懲すべし』との重大なる訓令を受けたる我軍は東北軍全滅の方針を以て奉天城の内外を占領すると共に奉天郊外東北航空隊及飛行場を占領した。寫眞は即ちその司令部。（同上）日支兩軍の衝突と共に奉天滿鐵附屬地に於ては自警團組織せられ手薄の軍隊を援助して非常警戒に當つた。（左上）奉天商埠地に於て最も繁榮を極むる四平街である。（同下）城内小西門下に於て我兵が通行支那人の身邊を檢査しつつあるところ。

滿洲事變寫眞 ◇◇◇（その四）

（右）九月十九日長春南嶺の戰鬪は甚だ激烈を極めた。南嶺は長春支那街の南市外に在り支那軍の兵營所在地で日本滿鐵附屬地から一里ばかり南に當つてゐる。始め此地には支那兵三千あり、頑强に抵抗した爲め我軍に死傷二百名を出すの大損害を蒙らしめたが、戰鬪實に十時間に亙つて漸く敵を驅逐した。寫眞は戰後、長春驛頭に揭げられた警備司令部の看板。（左上）日支兩軍衝突の飛電傳はると共に奉天には各地よりの援軍續々到着した。（同下）我軍の占領したる東大營に於ける武器引渡しの光景で小銃約七百挺、機關銃十二門、彈藥六百萬發其他である。

（右）長春驛に揭げられた警備司令部の看板

（左上）奉天驛に到着する援兵隊

（同下）奉天東大營に於ける武器引渡し

（右上）奉天へ向ふ松井中佐と平田少佐　（同下）朝鮮軍、龍山を出發せんとす

（左）緊張水も洩らさぬ參謀本部玄關

（右上）日支兩軍衝突事件漸次擴大する傾向あるに鑑み、參謀本部第二部（支那）の平田少佐並に陸軍省新聞班次長松井中佐は九月二十一日朝羽田飛行場發一路奉天に向つた。寫眞の左松井中佐、右平田少佐である。（同下）事變突發の九月十九日朝鮮軍に出動命令下り先づ龍山步兵第○○聯隊は同日午前十時より三十分毎に臨時列車を以て輸送を開始した。寫眞は卽ち龍山驛出發の光景である。（左）九月二十日、滿洲事變に關し陸軍首腦部の重要協議を開いた參謀本部は、朝來憲兵に依り物々しく警戒せられ事態の重大化を想像せしむるに十分なるものがあつた。

（右上）九月十九日我軍の占領したる奉天長官公署で、奉天政府の主腦部である。（同下）我軍の砲撃に依り無殘にも破壞せられたる奉天東大營内の慘狀で、此處は北大營と共に支那東北軍の兵營である。我軍の攻擊したる際には騎兵二個中隊約三百名、追擊砲兵若干があつたが、忽ち武裝を解除された。（右上）寬城子方面の戰鬪に於て我軍の鹵獲したる兵器其他を支那の荷車に積込み苦力を督して運搬しつつある光景。（同下）事變突發の夜奉天滿鐵附屬地に於て兵士と自警團員共同警戒に任じつつある有樣である。

（右上）我軍の占領したる奉天長官公署　（同下）奉天東大營破壞の慘狀
（左上）鹵獲品を運搬する我軍　（同下）滿鐵附屬地境界線の夜警

滿洲事變寫眞 ◇◇◇（その七）

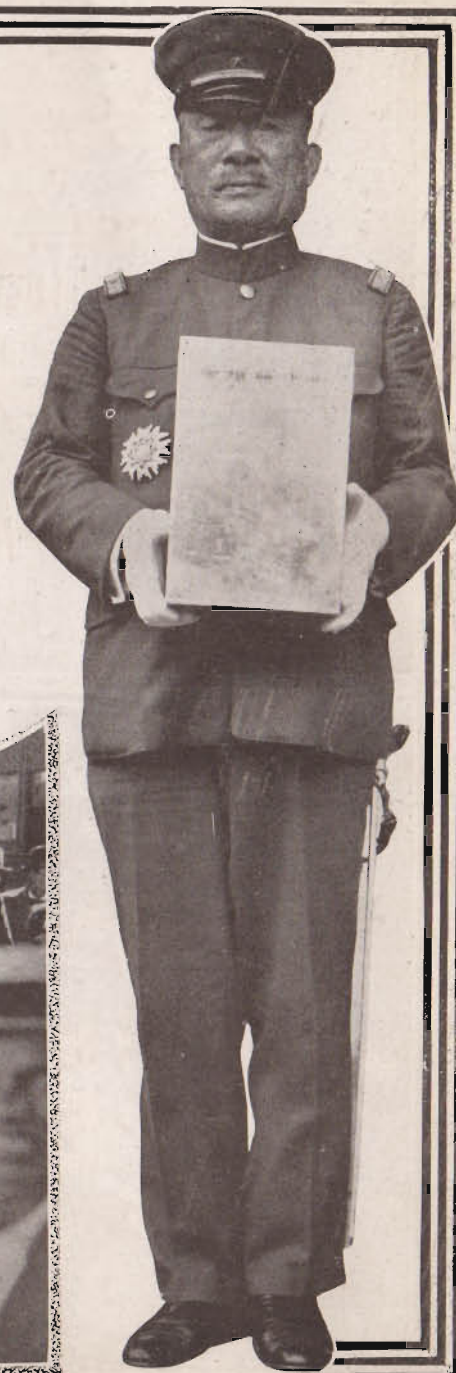
（右上）朝鮮軍の出發を見送る人々　（同下）奉天驛に於ける〇〇聯隊の見送り
（左上）長春驛に集合したる我軍　（同下）長春方面に於て活動したる我が野砲

（右上）九月十九日滿洲に向け輸送中の第〇〇師團管下の混成旅團各部隊に對し一時新義州以南に出動を停止して時機を待つべく電命を發したが翌二十日に至り、朝鮮軍司令官林中將は滿洲の事態急迫を告ぐるものあるに依り獨斷を以て待機中の軍の一部に出動指令を發した。寫眞は盛んなる見送りを受けつつ滿洲に向はんとする朝鮮軍。（同下）九月二十日長春吉林方面の情勢不安を告ぐるものあり奉天駐箚の步兵第〇〇〇聯隊は急遽同方面に出動した。寫眞は奉天驛の見送り。（左上）吉林方面に向はんとする我軍の長春驛前集合。（同下）長春に於ける我が野砲である。

（右上）長春駐屯軍は關東軍司令官の命令を受け九月十九日午前一時半南嶺旅團を夜襲し激戰十時間の久しきに亘り遂に約三千の支那兵を潰走せしめたが我軍の戰死者倉本中隊長以下下士卒三十二名、負傷者百四五十名の多さに上つた。寫眞は第〇聯隊戰死者聯隊葬の光景。（同下）南嶺に於て戰死したる獨立守備隊第一大隊第三中隊長倉本茂大尉。（左上）奉天北大營の戰に奮戰重傷を負ひたる獨立守備歩兵第二大隊附野田耕夫中尉。（同下）長春駐屯第〇聯隊に於て將校婦人會及び特志看護婦會の會員等我軍の負傷者を看護しつゝある有様。

（右上）歩兵第〇聯隊戰死者の聯隊葬　（同下）戰死したる倉本中隊長
（左上）奉天にて重傷を負ひたる野田中尉　（同下）長春に於ける將校婦人會員の負傷者看護

滿洲事變寫眞 ◇◇◇（その九）

（右）皇后陛下恩賜の繃帶を捧ぐる杉山陸軍次官（左上）ダンサー連が情けの慰問袋
（中下）吉林より長春へ避難し來れる邦人（左下）支那學生團に襲擊されたる王外交部長

（右）畏くも皇后陛下には今回の事變に出動、名譽の負傷をなしたる將卒に對し、繃帶百五十卷御下賜の御沙汰あらせられた。寫眞は杉山陸軍次官、御下賜の繃帶を拜受したるところ。（左上）九月二十八日の朝、華やかにダンサアの一團が突然陸軍省新聞班を訪れ、彼女等の美しい情けに成る慰問袋を持込み滿洲への傳送方を依賴した。（中下）九月二十日吉林の形勢急を告げたる爲め同地在住の邦人等續々長春驛へ避難し來れる光景。（左下）支那南京政府の外交部長王正廷氏は九月二十八日同地外交部に於て對日外交の失敗に憤慨せる數百名の支那學生團に襲擊せられ瀕死の重傷を負はされた。寫眞は王正廷氏。

關東地方強震被害

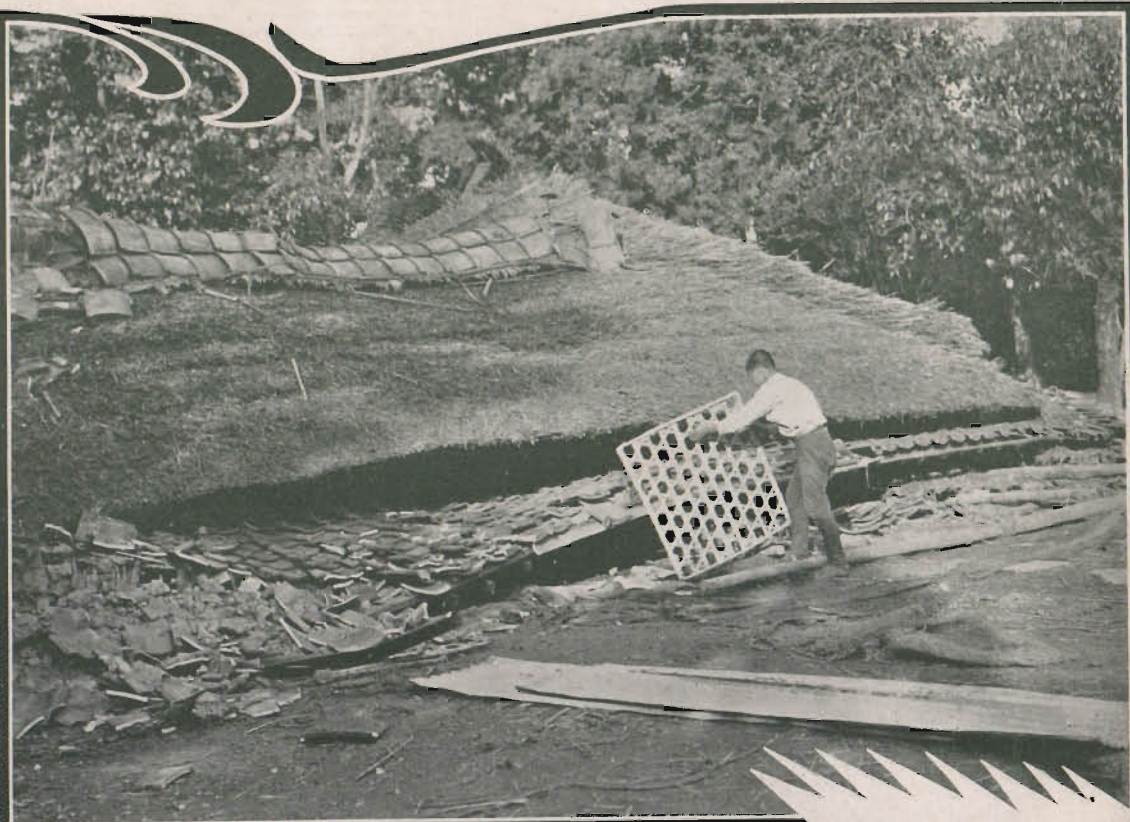
九月二十一日午前十一時二十分頃、突如關東地方に上下動より水平動に移つた近來稀有の強震があつた。震央は東京を距る北西約六十キロ、埼玉縣仙元山附近と測定せられたが、最大震幅五十五ミリで埼玉、群馬兩縣下の被害殊に著しく、埼玉縣下に於ける死者十一名

中央氣象臺の地震計

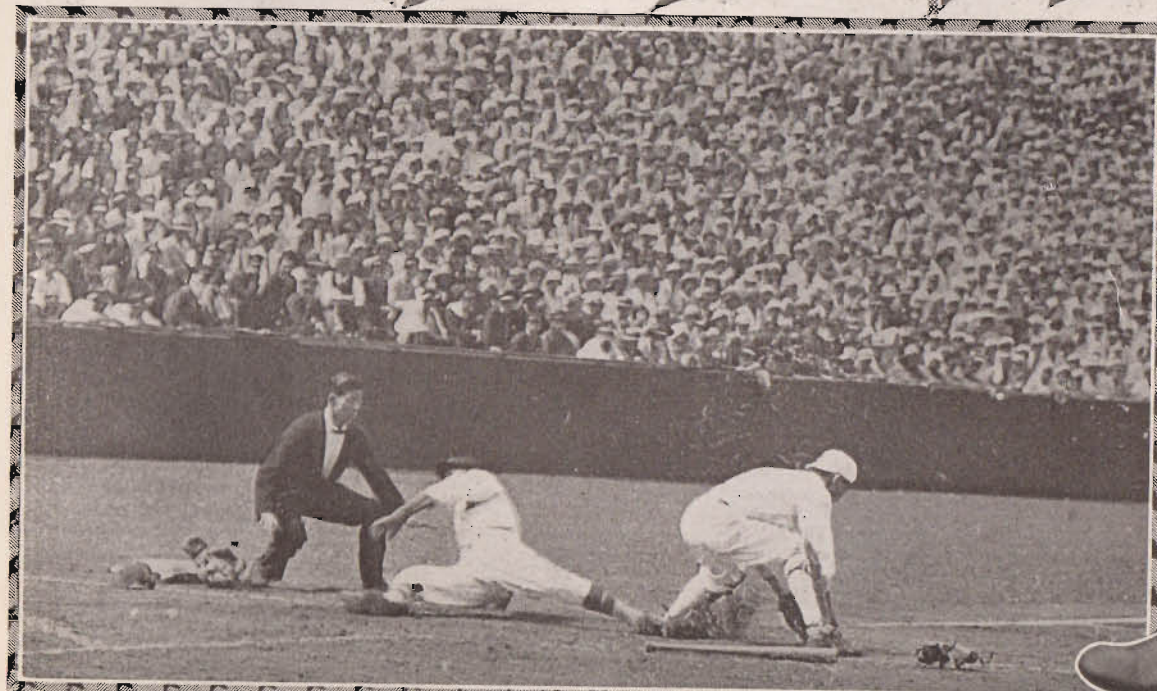
埼玉縣吹上村氷川神社々務所の倒壞

荒川堤防上の龜裂

深谷小學校庭に於ける避難民

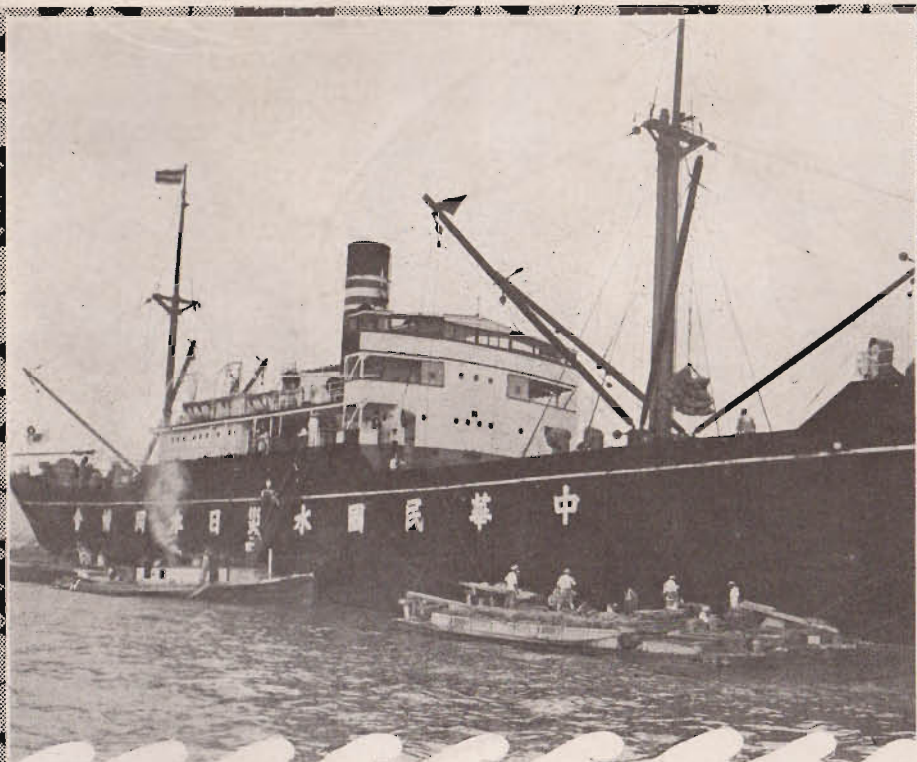
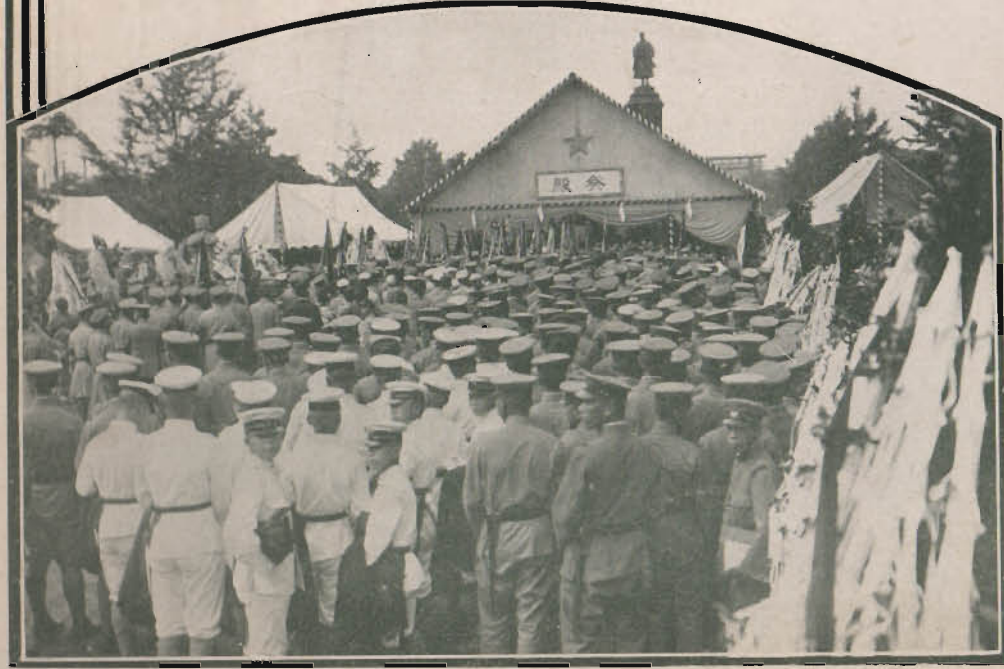
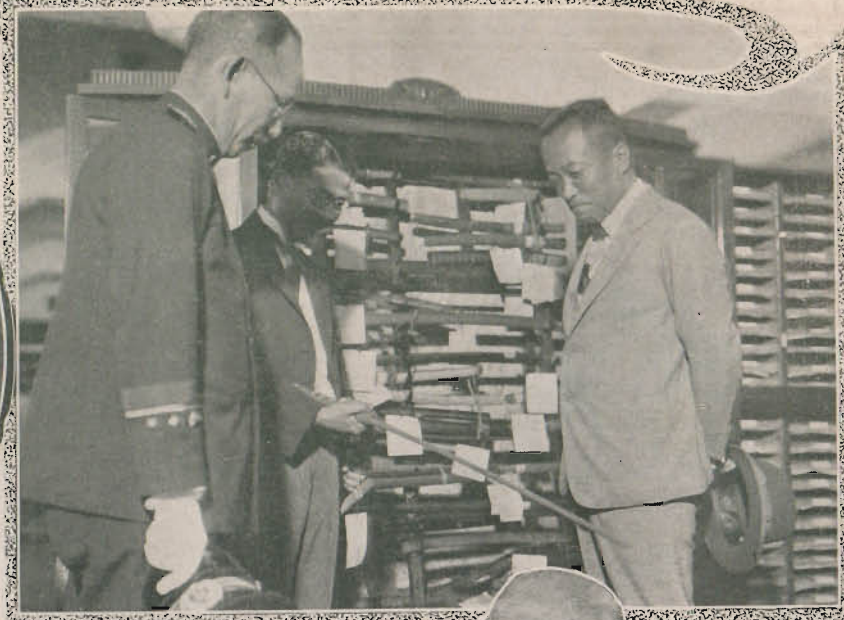
埼玉縣吹上村農家の倒壞

リヤカアに乗る避難民

群馬縣下に於ける死者五名、兩縣下の重輕傷者合計百五十名の多きに上り埼玉縣下の總損害約百萬圓に達した。就中同縣深谷町附近の被害最も甚だしく同町富國館製絲工場の八十尺に餘る煉瓦煙突倒壞しその下に遊びゐたる幼兒三名壓死したるは慘鼻の極みであつた。寫眞は孰れも今回强震の被害狀況を示せるもの、前の頁の右は熊谷附近荒川堤防上の龜裂、左は東京中央氣象臺地震計に表はれたる今回强震の震幅。同下は埼玉縣下吹上村氷川神社々務所倒壞の慘狀又後の頁の右上同村大鷲村農家の倒壞。同下**リヤカア**に乗る避難民。左は埼玉縣比企郡深谷小學校庭に於ける同町の避難民

最近時事小景 ◆◆◆（その一）

（右）全國選抜少年野球試合は九月二十七日午後一時十分より戸塚球場に於て開始せられ澄宮殿下御臨場始球式を遊ばされた。寫眞は殿下御投球の光景である。（上段右）本年度東都六大學秋の野球リーグ戰は九月上旬より開始せられたが、春のシーズンに不幸休場の止むなきに至りたる明大軍更生の意氣凄まじく奮闘、早慶兩軍を撃破し、本稿〆切の頃までは本シーズンの優勝確實なるものがあつた。寫眞は明大軍の猛撃に遭つて慘敗したる早大第一投手伊達君（同中）明大軍殊勳の田部投手と井野川捕手。（同左）慶應軍を破りたる立教辻投手（左下）九月十三日慶帝第二回戰四回の表、慶軍堀君生還の刹那。

最近時事小景（その二）

（**右上**）駐日支那公使將作賓氏は九月二十二日の朝東京驛着列車にて着任、直ちに麻布狸穴の支那公使館に納まつた。（**中上**）支那揚子江岸未曾有の大洪水慰問の爲め四千噸の慰問品を滿載して罹災地に向つた天城丸は、時恰も滿洲事變に際し支那側より該慰問品の受納方を拒絶され空しく日本に引返した。（**左上**）四十を越した中婆さんの武林文子さん、**ホツプ**姿で若返り八年ぶりの歸朝である。（**右下**）支那水害の慰問使として神戸を出發、罹災地に向つた貴族院議員深尾男は支那側の不興に逢ひ慰問もそこ／＼空しく東京に歸つて來た寫眞は出發前の深尾男。（**左下**）十月一日芝公園に於て自由勞働者達の爲め聖勞院主催の下に運動會が催された。寫眞は當日の呼物俵運びの**リレー**である。

最近時事小景（その三）

（右上）東久邇宮殿下には九月二十五日午前十時櫻田門外の新警視廳に御成りあり刑事部參考室及び鑑識課消防室等を極めて御熱心に御見學あらせられた。寫眞は大久保利通卿暗殺使用の兇器を御覽あらせられる殿下で、刀を持てるは吉川鑑識課長。左は高橋警視總監である。（同下）去る七日ロンドンに於て開催せられた英國化學工業學會創立五十年記念祝賀會は、多年同學會の爲めに貢献した我が工學界の元老高松豐吉博士に對し最高の記念賞牌を贈つて來た。寫眞は同博士。（左上）九月十七日、皇后陛下の御妹、東本願寺裏方智子の方は御弟君東伏見伯のピアノの伴奏で自作『同胞の歌』を**ポリドール・レコード**に吹き込まれた。（同下）支那官兵の爲めに無殘殺害せられたる中村參謀大尉と井杉元騎兵曹長の陸軍葬は九月二十七日九段靖國神社前廣場にいと盛大に執行せられた。